

「演じること」と国語科教育

―その意義・歴史・可能性―

三船友理子

本稿は国語科における演劇および戯曲教材の活用について論じたものである。

「俳優」「戯曲」「観客」「舞台」の四要素からなる演劇は、演じられてはじめて完成形となる。また登場人物たちの会話のみで物語が展開していくため、声に出して読むだけではなく、身振り手振りを交えて演じることでより作品がかたち作られていく。

このような特徴をもつ演劇は、国語科の「読むこと」「書くこと」「話すこと・聞くこと」のすべてで活用できる教材であるが、教科書や教師用指導書を見る限り、授業でその特徴が活かされていないように思われる。

そこで、これまで演劇および戯曲教材がどのように扱われてきたのか、現在との違いはあるのかを考察した。その結果、その扱われ方は小説などの文学作品と同じか大差ないもので、戯曲教材を活かしきれていなかった。

この結果を踏まえ、どうすれば戯曲教材を有効に活用できるのかを検討し、演劇および戯曲教材の活用法を論じた。